

## ご 挨拶

### 第 6 回日本動機づけ面接協会年次大会の開催にあたって

大会長 北田 雅子 (札幌学院大学 人文学部 教授)

みなさん、こんにちは。この度、光栄なことに第 6 回日本動機づけ面接協会年次大会の大会長を務めさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

原井先生が動機づけ面接協会を設立、2013 年 3 月にミラー博士を招聘、名古屋で集中ワークショップ (以下 WS) を開催したのが第 1 回目の大会でした。あれから、6 年の月日が経過したことになります。ミラー博士の来日を皮切りに「動機づけ面接を身につける」の著者であるローゼン・グレン博士、ミラー博士と共に MI のエビデンス構築に活躍されたトップトレーナーであるヤーネ博士、そして、動機づけ面接治療整合性尺度 (MITI) の開発とトレーニングで世界的にも有名なデニス博士と、次々に世界の MI を牽引しているトレーナーが来日してきました。そして、2018 年の第 6 回目はいよいよテリー・モイヤーズ博士が来日します。

テリー博士は、ミラー博士から直接 MI を学んだ弟子の一人であり、動機づけ面接 (以下 MI) に関する実証的な研究でも知られています。昨年、来日したデニス博士と共に MITI の開発に従事しています。ミラー博士とロルニック博士の著書である MI-3 (第 3 版 2012 年発行) では、テリー博士の論文が 30 以上も引用されています。そして、なにより原井先生とテリー博士は非常に仲が良いのです。3 月 16 日からの 2 日間の集中 WS では、テリー博士と原井先生の息の合った WS が展開されると期待しています。日本にいながらにして、世界の MI の潮流に触れることができる貴重な機会になると思います。

それでは、以下に今回のプレ WS と大会の内容を簡単にご紹介いたします。

3 月 16 日 (金) と 17 日 (土) は、テリー博士と原井先生のお二人によるワークショップが開催されます。今回は、MI と CRA (community reinforcement approach) を組み合わせた治療プロトコルについて、飲酒問題をターゲットにした介入、というテーマでワークショップが実施される予定です。これまで、海外から招聘されたトレーナーによる WS は、MI の初心者ならびに中級者をターゲットとした内容が多かったのですが、今年は初めて他の治療プロトコルと MI とのコラボが取上げられます。日本国内においても昨今、CRAFT (Community reinforcement approach and family training) に関心が集まっていることから、この WS はきっと、MI の新たな魅力が発見できる非常に貴重な機会になると思います。

3 月 17 日 (土) の夕方からは、看護師向けの MI 初級者ワークショップが行われます。毎年満員御礼のとても人気の高い WS です。3 月 18 日 (日) は、第 6 回の年次大会です。午前中はテリー博士から「MI を広げてさまざまな問題と患者に使う：どこまで行けるだろうか？」というタイトルで基調講演があります。その後のシンポジウムでは「MI を面談のプラットフォームとして他領域とのコラボを考える」というテーマで北田が大会長講演を、「MI の慢性疾患の患者さんへの応用～DM を例として」と題して、野村総合研究所産業医の村田千里先生にご講演をいただきます。

私からは、これまで北海道を中心に開催してきた WS 参加者への質問紙調査から、MI が面談のプラットフォームとして機能することのメリットについて組織、地域、連携、をキーワードに話題提供をさせていただきます。

村田先生からは、先生のご専門である糖尿病治療、禁煙治療、産業医という視点から、ヘルスケア、特に慢性疾患の治療という臨床における MI の適応について話題を提供させていただきます。

お昼休みは、ポスターによる一般演題発表があります。午後は、クリストファー・ワグナーと カレン・インガーソルによる「グループにおける動機づけ面接」を翻訳された大阪大学の教授である藤岡淳子先生の登場です。先生からは、「司法領域におけるグループ MI の適応」というテーマで話題提供をしていただきます。司法臨床は変化への動機付けが難しいといわれています。これまでの司法臨床における実践、特に薬物犯と性犯へのグループアプローチを中心に変化への動機付けのコツについて話題提供をしていただく予定です。その後、チェンジトークジャパンで日本におけるグループ MI の第一人者である山田英治先生から、グループ MI の理論と実践について WS 形式で紹介していただく予定です。

午後は、別会場でテリー博士の MITI4 コーディング WS が同時開催となります。「どちらも出たい」というみなさんの声が聞こえてきそうです。

以上が第 6 回のプレ WS と学会の概要となります。今年は、これまで以上にさらに MI の発展的適用に向けての新しい風が吹くような、そんな大会になる予感がします。

みなさんと一緒に MI の新しい可能性と魅力を存分に味わってみたいと思います。ご一緒できるのを楽しみにしております。

## プログラム

**午前の部** 10:00～12:30

10:15～11:00

keynote プレゼンテーション

”Stretching MI across problems and patients: How far can it go?”

MI を広げて様々な問題と患者に使う：どこまで行けるのだろうか”

テリー・モイヤーズ(ニューメキシコ大学心理学部准教授)

11:15～12:30

シンポジウム「MI を面談のプラットフォームとして」

他領域とのコラボレーションと慢性疾患の患者さんへの応用～DMを例として～

話題提供者：北田 雅子

(札幌学院大学 動機づけ面接法調査研究所代表)

村田 千里

(野村総合研究所 産業医/東京都済生会中央病院 糖尿病・内分泌内科)

**昼食休憩** 12:30～13:30

**午後の部** 13:30～16:30

GMI (グループMI) の魅力

13:30～14:15

司法領域におけるGMI の応用

話題提供者：藤岡 淳子 (大阪大学 教授)

14:30～16:30

イントロ・ミニ Group MI WS

「1対1からグループへのMI の適用」 ～グループの力を引き出し課題解決へ向かう～

講師：山田 英治 (チェンジトークジャパン代表)

## 基調講演

テリー・モイヤーズ(ニューメキシコ大学心理学部准教授)

|  |  |
|--|--|
| <p><b>Title</b><br/>Stretching MI across problems and patients:<br/>How far can it go?</p>   | <p><b>タイトル</b><br/>MI を拡げて様々な問題と患者に使う:どこまで行けるのだろうか?</p>  |
| <p><b>Abstract</b><br/>The clinical method of motivational interviewing (MI) evolved from the person-centered approach of Carl Rogers, maintaining his pioneering commitment to the scientific study of therapeutic processes and outcomes.<br/>Applications of MI have spread far beyond clinical psychology into fields including health care, rehabilitation, public health, social work, dentistry, corrections, coaching, and education, directly impacting the lives of many people. The public relevance and impact of clinical psychology are illustrated in the similarity of MI processes and outcomes across such diverse fields and the inseparability of human services from the person who provides them, in that both relational and technical elements of MI predict client outcomes. Within the history of clinical psychology MI is a clear product of clinical science, arising from the seminal work of Carl Rogers whose own research grounded clinical practice in empirical science. As with Rogers' work 70 years ago, MI began as an inductive empirical approach, observing clinical practice to develop and test hypotheses about what actually promotes change.<br/>Research on MI bridges the current divide between evidence-based practice and the well-established importance of therapeutic relationship. Research on training and learning of MI further questions the current model of continuing professional education through self-study and workshops as a way of improving practice behavior and client outcomes.<br/>I further discuss the future of research on MI based on our recent published meta-analysis.<br/>Ref.<br/>1) Miller, William R., Moyers, Theresa B. Motivational interviewing and the clinical science of Carl Rogers. Journal of Consulting and Clinical Psychology. vol. 85, no. 8, p. 757-766.2017,<br/>2) Magill, Molly, Apodaca, Timothy R., Borsari, Brian et.al. A Meta-Analysis of Motivational Interviewing Process: Technical, Relational, and Conditional Process Models of Change. Journal of Consulting and Clinical Psychology. 2017,</p> | <p><b>要約</b><br/>動機づけ面接の臨床的な方法はカール・ロジャースによるパーソンセンターのアプローチから発展したものである。彼が臨床心理学における先駆者としてコミットしていた治療プロセスを科学的に研究するという態度を今も守り続けている。<br/>MI の適用は臨床心理学の領域をはるかに乗り越えて、健康維持やリハビリテーション、公衆衛生、ソーシャルワーク、歯科、司法矯正、コーチング、教育にまで及んできており、多くの人々の生活に影響を与えている。臨床心理学が社会全体に対してもつ意義と影響は、これだけの幅広い領域に対して MI のプロセスとアウトカムが示すものとよく似ている。対人援助の領域において、働く人と援助そのものを分けて考えることは不可能であり、それは MI における関係性と技能的な部分がクライアントのアウトカムをそれぞれ予測することと重なっている。<br/>臨床心理学の歴史の中で MI は臨床科学の産物であることがはっきりしている。カール・ロジャースによる歴史的な業績は実証的な科学に基づいて臨床実践を行うことを目指したことである。70 年前のロジャースの仕事と同様に MI は知見を帰納的に扱うアプローチとして始まっている。臨床の実践を観察し、何が本当に変化を起こすについての仮説を立て、それを実験で検証することによって進歩してきた。<br/>MI の研究は現在生じている実証に基づく実践(EBP)と治療関係性の重要性との間のギャップを埋めるものである。MI のトレーニングと学習の研究からは、現在一般的に行われている専門家教育のやり方に対して疑問を投げかける。自己学習とワークショップの形で、臨床場面の行動が変わり、クライアントの結果が良くなるとは思えない。<br/>さらに、今後の研究の方向について最近出したメタアナリシスに基づいて論じる予定である。<br/><b>文献</b><br/>1) Miller, William R., Moyers, Theresa B. Motivational interviewing and the clinical science of Carl Rogers. Journal of Consulting and Clinical Psychology. vol. 85, no. 8, p. 757-766.2017,<br/>2) Magill, Molly, Apodaca, Timothy R., Borsari, Brian et.al. A Meta-Analysis of Motivational Interviewing Process: Technical, Relational, and Conditional Process Models of Change. Journal of Consulting and Clinical Psychology. 2017,</p> |

## ポスター発表

### 薬学生に対する動機づけ面接の講義の効果

挾間雅章\*<sup>1</sup>、鳥嶋雅子\*<sup>2</sup>、藤原広臨\*<sup>3</sup>

京都大学医学部附属病院 \*<sup>1</sup>精神科神経科、\*<sup>2</sup>遺伝子診療部、\*<sup>3</sup>総合臨床教育・研修センター

目的：

筆頭発表者は薬学生に対する講義の中で、服薬アドヒアランスの向上に役立つ手法として動機づけ面接（MI）を紹介してきた。現行の講義の効果を評価し、今後の改善につなげることを目的として、省察的な研究を行った。

方法：

京都薬科大学薬学科 6 年生のうち選択科目として「精神医学概論」を受講している学生を対象に、MI を紹介する講義を 90 分間行った。スピリット、コミュニケーションの落とし穴と OARS、チェンジトークについて解説し、例として聞き返しを含むテレビ番組やモデル面接の映像を提示した。

講義時のアンケートと 2 か月後に実施した期末試験の回答を評価の対象とした。アンケートでは、(1)薬剤師としてのコミュニケーションの重要度と自信度、(2)講義の有用性をそれぞれ 10 段階で評価させ、(3)講義の感想を自由に回答させた。さらに(4)講義の最初と最後、期末試験の 3 点で Helpful Responses Questionnaire (HRQ) 薬剤師版に回答させ、2 名の評価者が独立してブラインドで MITI3.0 の行動コードによって評定した。

なお、本研究は京都大学医学部「医の倫理委員会」の承認を受けている。

結果と考察：

対象者 132 名のうち 77 名から研究参加の同意を得た。

(1)講義の前後でコミュニケーションの重要度と自信度は増加し（重要度： $8.3 \pm 1.5 \rightarrow 9.2 \pm 1.1$ 、自信度： $4.9 \pm 1.8 \rightarrow 5.4 \pm 1.7$ 、平均 $\pm$ SD）、(2)講義後の有用性の評価は  $8.8 \pm 1.3$  であった。(3)感想は、実習での体験と関連づけているものや、映像に言及しているものが多かった。(4)HRQ に対する聞き返しの頻度は、講義直後には増加したが、2 か月後には減少していた（講義前、講義後、試験： $23\%$ 、 $77\%$ 、 $43\%$ ）。逆に、MI 不一致は講義直後には減少したが、2 か月後には再び増加していた（ $77\%$ 、 $29\%$ 、 $67\%$ ）。

MI の講義の直後には情意面と認知面における効果を認めたが、その効果は十分に持続しなかった。効果を持続させるには、より能動的な学習を取り入れる必要があるかもしれない。

---

---

MEMO

---

MEMO

---

---

MEMO